


## KYOTO ART WALK 2005

@元離宮二条城／二の丸御殿台所

@清水寺／成就院・経堂

@高台寺／傘亭

@西行庵



普段は非公開の西行庵で行われた茶会。虫の音だけが聞こえる静かな秋の夜、蟬燭だけの灯りの中で、太田さんの夜咄、濃茶の席などが設けられた。

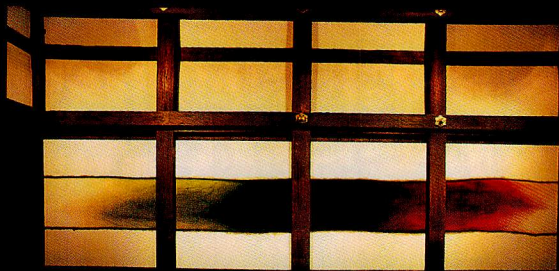
### 貴賤もなければ、良し悪しもない、ARTとは「平等で普遍的」なもの。

「ARTとは、理解者を必要とするものである」。本当のハイ・ソサエティにおける選ばれた人だけのもの。もしくは、一部の気取り屋がその真の意味を知らずに濫発する言葉。昨今のARTは、その両極でもって語られることが多い。だがどちらも正解ではない。ARTに貴賤もなければ、良し悪しもない。例えば、ポッティチェリ、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロを支援したメディチ家がそうだった。ワグナーに傾倒したルートヴィヒ二世もそうだった。今、あまりにも簡単に使われすぎる「ART」という言葉。その意味を問うとき、まず「パトロン」なくしては語れないものだとこのことを知る必要がある。「出資者」という言い方が不的確なら「理解者」と呼んでもいい。

今回、そのとある理解者たちが、その事を知ったうえで、アーティストとARTを現出する場を京都に用意した。その場所が、元離宮二条城の二の丸御殿台所であり、清水寺の成就院であり、高台寺の傘亭であり、西行庵なのである。理解者の代表として、オーガナイザーを務める大久保浩さんはこう語る。「自分が若いとき、京町家を笑いながら洋風建築に改装していた。今はそれが恐ろしい。なぜあの時、理解する心がなかったのか、なぜ理解しようとしなかったのか」。匠と呼ばれる人たちが造り上げた伝統も、ひとつのARTであったと認識するならば、それを破壊する行為こそ、貴賤もしくは、良し悪しの尺で測れることができるものであろう。だからこそ、大久保さんはこの場を選んだ。同じ轍は踏まない、踏ませない。理解者も己を反省し、今がある。老若男女を問わず、ARTは誰の前にも平等に普遍的に現れるものだから。

今回のイベントに名を連ねるアーティストを知らなくてもいい。彼らが紡ぎ出すのがどんなARTであるかを知らなくてもいい。だが、作品が発するエネルギーには「世界共通」の何かがある。その「何か」とは、平等であり、普遍的であり、理解者たちの原点なのである。ならば、我々一般人の前にも、常に開かれているのだが…。ARTが市民権を得るまでには、まだ少々の時間が必要だ。今回インスタレーションを行ったアーティストたちが、現代のダヴィンチに、そして明日のウォーホルになったとき、そのファーストステップが京都であったことを、我々は誇りたいと願っただけである。





←ポーランド・フランスのモニカ・クリクカさんが台所の襖に描き出したのは、「大動脈」。生命の力強さとともに、人の一生、「生と死」さえも表現する圧巻の筆致

↓現代美術の中でも有名なドイツの作家、ヴォルフガング・ライプさんの花粉のインスタレーションの代表作「5つの未踏峰」。今回は高台寺の傘亭でインスタレーションを披露し、大きな話題となった



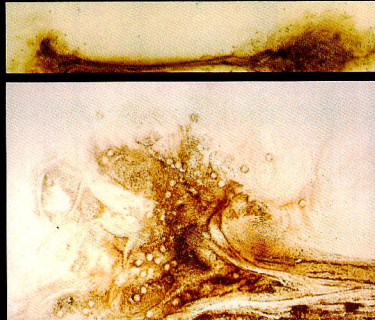
今回のイベントに参加したアーティストは全10名。高台寺傘亭ではヴォルフガング・ライプ（ドイツ）。元離宮二条城二の丸御殿台所では、白石由子（日本・フランス）、エヴェリーナ・ドミニック（ペラルーシ）、ドミートリー・ゲルファンド（ロシア）、モニカ・クリクカ（ポーランド・フランス）。清水寺成就院ではハンス・クリスティアン・ベルグ（フィンランド）、ペテリ・ニスネン（フィンランド）、トミ・グロンルン（フィンランド）、山元伸二（日本・イタリア・アメリカ）、西行庵土間席では太田達（日本）



フィンランドのハンス・クリスティアン・ベルグさんはLIGHTCELL（光細胞）作品を清水寺成就院のためにオリジナル制作した

## KYOTO ART WALK2005

元離宮二条城の二の丸御殿台所に広がるのは、アーティスト白石由子さんの「蜘蛛の糸」。天井の梁から、25個の鎖の箱に向かって、蜘蛛の糸が垂れ下がっている



山元伸二さんは清水寺経堂のために「眠るビジュヌの木」を屏風形式で発表。今回はキュレーターとしても活躍した



元離宮二条城の二の丸御殿台所でカメラ・リンダ（光の部屋）＝三次元音響観察室を造り上げたペラルーシのエヴェリーナ・ドミニックさん

エヴェリーナ・ドミニックさんとドミートリー・ゲルファンドさんによる「光の部屋」は、音を光として知覚するための、ある意味、錬金術的実験。カメラ・リンダが暗闇の中で三次元音響を映し出す



老舗和菓子店「老松」五代目の太田達さんが、西行庵に席を設けた。しかし茶は点てず、終始夜咄のみ。「掛け軸や茶室の造り、そして夜咄の面白さは世界共通。感覚は人類普遍なんです」

「KYOTO ART WALK 2005」実行委員会・代表の久保浩さん。「過去の共感こそ、現代美術のもたらすエネルギー」。四力所に及ぶ、通常では決して叶わない場での企画を実現したのはさすが

神奈川＆東京出身の作家2人組、マイさんとアイコさん。たまたま訪れた清水寺成就院で作品にふれ、4会場を回ることに。「こんな場所で展示会をしてみたいとしか今は言えません」と驚嘆の様子



現在フリーター中のコウセイさんは見るからにアート好き。当然観光ではなくメインは同イベント。「ここ以外に、東寺とか、建仁寺とか、イベントがあれば行ってます。やっぱりね

